

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化人類学における視聴覚教育の可能性：  
CD-ROM版「『楽園』の創造：  
バリにおける観光と伝統の再構築」によせて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 晋司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001977">https://doi.org/10.15021/00001977</a>

## 文化人類学における視聴覚教育の可能性 CD-ROM版「『楽園』の創造—バリにおける観光と伝統の再構築」によせて

山下 晋司

東京大学大学院総合文化研究科 教授

- |  |             |
|--|-------------|
| 1 CD-ROM版「『楽園』の創造—バリにおける観光と伝統の再構築」について | 3 授業の学生評価   |
| 2 「総合科目文化人類学」の授業方法                     | 4 視聴覚教育の可能性 |

### 1 CD-ROM版「『楽園』の創造—バリにおける観光と伝統の再構築」について

CD-ROM版「『楽園』の創造—バリにおける観光と伝統の再構築」は、同名のタイトルをもつわたしの論考（山下1996）をテキストとし、エキスパンドブックというソフトを用いて、文字テキストに映像と音楽を加えたものである。その基礎にある考え方はきわめて単純である。文字テキストを読みながら、文字情報では覆いきれない視聴覚情報—動画、音楽、写真—を該当箇所をクリックすることによって視聴できるようにし、それによって多面的な情報を提供する、というものだ。その意味で、このCD-ROM版は、コンピュータを利用したマルチメディア情報伝達のひとつの試みである。

文化人類学者はフィールドワークを行う際、視聴覚データをも収集するのがふつうなので、文字テキストだけでなく、視聴覚情報も含めた民族誌資料の出版はむしろ自然である。今後、本や論文という文字媒体に加えて、CD-ROMなどマルチメディア媒体によって民族誌資料を出版するということがおおいにありうる。とくにデータの蓄積媒体としてはCD-ROMはきわめてすぐれているように思われる。わたしの試みはそうした方向に向けてひとつのささやかな実験である。

以下に、使用した視聴覚情報のソースを示しておく。

#### I 動画（第2節で使用）

1. ワルター・シュピース「悪霊の島」（NHK教育『南島に消えた画家』1993年1月14日放映より）
2. 「バロンとランダ・バリ島の観光芸能」（国立民族学博物館ビデオテークより）

## II 音楽（第2節で使用）

1. ジャワのガムラン（Gamelan “Jipak Walik” [Cirebon], *The Sampler of World Music*, 1991, King Record, SSX36 より）
2. バリのガムラン（Gamelan Gong Kebyar “Paksi Ngelayang” [Bali], *The Sampler of World Music*, 1991, King Record, SSX36 より）
3. バリのケチャ（Kecak[Bona, Bali], *The Sampler of World Music*, 1991, King Record, SSX36 より）

## III 写真（撮影は断らないかぎり著者）

1. とびら
  - i) レゴン・ダンス（ミゲル・コバルピマス『バリ島』より）
  - ii) 著者山下晋司
  - iii) 山下晋司編『観光人類学』（東京：新曜社1996）表紙
2. はじめに
  - i) 魔女ランダ面
  - ii) バリの棚田
3. 第1節「楽園」バリの誕生
  - i) バリ娘（ミゲル・コバルピマス『バリ島』より）
4. 第2節「楽園」の演出家達と芸能の発明
  - i) 風景とその子供達（ワルター・シュピース）
  - ii) ケチャ
  - iii) クリス・ダンス
5. 第3節 観光開発と文化創造
  - i) ケチャとファイヤー・ダンスの上演広告
6. 第4節「消滅の語り」から「生成の語り」へ
  - i) バリニーズ・アート
7. おわりに
  - i) バリのポップアート
8. 著者のプロフィール
  - i) 著者写真
  - ii) 内堀基光・山下晋司『死の人類学』（東京：弘文堂1986）表紙
  - iii) 宮崎恒二・山下晋司・伊藤眞編『アジア読本・インドネシア』（東京：河出書房新社1993）表紙
  - iv) 山下晋司編『岩波講座文化人類学7・移動の民族誌』（東京：岩波書店1996）ケース

v) 山下晋司・船曳建夫編『文化人類学キーワード』（東京：有斐閣 1997）表紙

vi) Yamashita, Shinji, Kadir H. Din and J.S. Eades eds.

1997, *Tourism and Cultural Development in Asia and Oseania*, Kuala Lumpur:  
UKM Press, 表紙

## 2 「総合科目文化人類学」の授業方法

さて、スライドやカセットテープ、ビデオ等の視聴覚教材は、異文化の理解を目的のひとつとしてきた文化人類学の教育にとってはきわめて重要であり、わたし自身も授業では視聴覚教材を積極的に使ってきた。以下では、文化人類学教育における視聴覚教材の使用についてわたしの最近の経験を述べ、今後の文化人類学分野の視聴覚教育の可能性について考えてみたい。

ここでは東京大学教養学部の1998年度夏学期前期課程「総合科目文化人類学」での経験を中心に述べる。これは、専門に進む前の1, 2年生を対象とした「教養」としての文化人類学の授業である。したがって、専門的な知識を教授するというより、文化人類学の基本的な考え方を紹介することを目的としている。このレベルの授業では、視聴覚教材は「百聞は一見にしかず」で、とくに有効だと思える。

1998年度夏学期の総合科目文化人類学では、わたしがこの10年ばかり関心をもってきた観光人類学をテーマにとり上げた。講義のシラバスには、この授業のねらいを次のように述べた。

観光は現代世界においてきわめて重要な事実になりつつある。2000年には世界で年間7億5,000万人が国境を越えて旅行し、7,200億ドルが旅行に使われると予測されている。この授業では観光人類学の構図を述べたあと、4つの事例をビデオをとおしてみながら、観光客と観光客を受け入れる社会、観光と伝統文化、観光と地域開発、観光と移民などについて検討し、観光という窓から文化の動態を観察する。そうしながら、今日の文化人類学の一部に触れる。テキスト：山下晋司編『観光人類学』東京：新曜社 1996；副読本：山下晋司・船曳建夫編『文化人類学キーワード』東京：有斐閣 1997。

講義の全体は、観光というテーマを解題する第1部、観光の民族誌を扱う第2部、そして何を学んだかをまとめる第3部にわかれ、そのスケジュールは次のとおりであった。

- 第1部 観光というテーマ
  - 1 イントロダクション
  - 2 観光の誕生

### 3 観光人類学の構図

#### 第2部 観光の民族誌

- 4 ビデオ1「カンニバル・ツアーズ」(デニス・オルーク 1987)
- 5 「カンニバル・ツアーズ」, あるいは観光のアイロニー
- 6 ビデオ2「南島に消えた画家」(NHK 教育 1993)
- 7 「楽園」バリの創造—生成する文化
- 8 ビデオ3「観光と民俗文化—遠野民俗誌 94/95」国立歴史民俗博物館 1996」
- 9 遠野の民話観光—観光と地域アイデンティティの創造
- 10 ビデオ4「グッバイ・ジャパン—花嫁は神々の島を目指す」(NHK 教育 1996)
- 11 観光の彼方, あるいは「はざま」に生きる

#### 第3部 総括

- 12 質疑と総括討論
- 13 試験

授業の中核部分をなす第2部「観光の民族誌」では、民族誌を言葉で講義するのではなく、4本のビデオ(上記のビデオ1~4)を見せ、これらの映像のメッセージを読み解くことにとって、4つの事例—パプアニューギニアのセピック、インドネシアのバリ、日本の遠野、そしてバリの日本人観光客—の問題点を検討した。

この場合、映像を講義の補助的な素材として用いるのではなく、映像をみることから考え、議論を組み立てる方法を試みた。まず説明ぬきにビデオを見せ、コメントをリアクションペーパーとして書いてもらい、翌週にそのいくつかを紹介し、そのあとでわたし自身が映像について解説を加えるというやり方である。そしてビデオ解説の時間の最後に、当該のビデオに関する参考文献とキーワードを挙げ、テキストと副読本の該当箇所を参照するように指示した。

このやり方をとおしてとくにめざしたことは、ビデオを受動的にみるのではなく、クリティカルにみる力を養い、映像から考えていく力をつけることであった。そのために、リアクションペーパーを書かせる際には、自由コメントのほかに課題も与えた。例えば、(1) ビデオにキャッチコピーをつけよ、(2) ビデオをみて気付いたことを3点挙げよ、(3) ビデオのキーワードを3つ挙げよ、(4) BGMについてコメントせよ、(5) ビデオ1とビデオ2を比較せよ、(6) ビデオ2のナレーションについて思うところを述べよ、(7) ビデオ3についてビデオの作り方についてコメントせよ、(8) ビデ

オ4をみて国際結婚の是非についてコメントせよ、などといった課題である。

学生達のコメントは、次回の授業までに目をとおし、ビデオ解説の時間に紹介した。聴講者が300人以上いたので、全員のコメントを紹介するのは時間的に無理だった。それゆえ、わたしが適宜選択し、紹介した。これによって、教師が一方的に講義するのではなく、学生の反応を確かめながらすすめる、インタラクティブな授業をめざした。

さらに、映像情報がどのようにして作られるかに関し、ビデオ1（オーストラリアの映画作家デニス・オルークの作品をNHKが短縮し、日本語の字幕をつけたもの）とオルークのオリジナル版との比較とか、バリの日本人妻をめぐるNHKと民放の放送のしかたの比較を試みた。また、わたしのインドネシアのバリやトラジャでの映像取材の経験を話し（山下1999:174-198）、日本のドキュメンタリーがどのようにして作られるかについて解説した。

### 3 授業の学生評価

この授業方法がどのように受けとめられ、どのような効果をもたらしたかという点について、最後の総括の時間にアンケートし、聴講した学生に授業を評価してもらった。アンケートの質問は、(1) ビデオ使用の善し悪し、(2) 説明なしにビデオを見、リアクションペーパーを書き、次回に解説を聴くという方法について、(3) この授業をとおして学んだこと、(4) その他自由に感想を述べよ、の4項目である。アンケートの回答数132名であった。

まず、ビデオ使用の善し悪しについては、「良い」と答えた者が131名、「良くない」が1名。この結果は、回答者のほぼ全員がビデオの使用をポジティブに受け入れていることを示している。「良くない」と答えた者の理由は「制作者の偏見がありそうだから」というものだった。

次に、この授業で試みたような授業法については、「良い」と答えた者が109名、「良くない」と答えた者が20名、「良い面も悪い面もある」と答えた者が3名であった。したがって、82.6%の学生達がこの方式を支持したことになる。「良くない」と答えた15.2%の回答者の主たる理由は、見たビデオの解説を翌週ではなく、その日のうちに聞きたいというものであった。しかし、90分の授業時間の中では、ビデオを見せて、コメントを書かせ、解説をつけるのは、時間的に無理である。

さらに、学生達が何を学び、どのように受けとめたか、彼らの声をいくつか紹介してみよう。

- 最後まで飽きなかった。学問と現実のフィードバックのバランスが良くとれてい

た。楽しい授業だった。

- 今まで受動的に映像をみるだけだったが、この授業を受けて考えながらみるものが多くなった。
- 同じトピックでも媒介されるメディアの意向によってたいへん違う印象を与える作品が出来上がることについて知った（カンニバル・ツアーズのオリジナル版と日本語版、バリの日本人妻に関するNHKと民放など）。また、映像をいかにみるか学べた。
- 他の人達のコメントを聞いたことがよかった。学生のような意見を取り入れた授業は他の講義にはなく、面白かった。他の人の意見や感想が非常に参考になった。人によって意見がまったく違うのに驚いた。
- たくさん毎回書いたのにあまり読み上げられなかった。まったく取り上げられなかったコメントはどのように評価されるのか。授業の流れの中で関連のうすい意見が排除されてしまうのは良くない。
- 価値観は人それぞれに違うもの。正しい答えなんてあるのか。
- 学生の意見を紹介するのもいいが、それが長すぎると聞く方はうんざりしてしまう。学生の意見が中心になって先生の意見がよくわからなかった。先生の意見をもっと聞きたい。
- ビデオの回だけ急に人数が増える。VTRの感想を書かなければならないとき出席、そうでないときは欠席という学生が多かった。

最後のコメントは、解説のときは出席をとらないので欠席してもわからないが、提出物は出しておかないと成績に響くかもしれないと考える学生達の「悲しいさが」によるものであろう。教育効果としては、これでは困るのだが、自分の学生時代を振り返るとあまり大きなことは言えない。

さて、異なる4本のビデオをみて、リアクションペーパーを書き、解説を聞くことをとおして、授業についてきた学生にはビデオをある程度クリティカルにみる訓練になったようである。例えば、「カンニバル・ツアーズ」のオリジナル版と日本語版を比べてみると編集による違い、日本のオーディエンスと欧米のオーディエンスの違いがわかる。また、ビデオ1とビデオ2を比べてみれば、欧米と日本のドキュメンタリーの作り方の違いがわかる。また、バリの日本人妻をめぐる取材のスタンスによって異なった「事実」が作り出されることがわかるだろう。そして回が進むにつれて、学生達がビデオを意識的にみるようになる様子が、リアクションペーパーをとおしてわかった。重要なのは、授業の進展にともなうこの意識の変化である。

また興味深いのは、他の学生達の意見が聞いてよかったというコメントである。このことは、授業が教師と学生というコミュニケーションの方向だけでなく、学生どう

しのコミュニケーションの場所でもあることを示している。同じものをみても、見方が人によって違うということを学生達は学び、自分の見方を相対比する訓練になったかもしれない。

先のように、このクラスを受講者は最終的に300人余りだったので、学生達のビデオへのコメントをすべて紹介する時間的余裕はもろくなかった。それで現実にはいくつかをピックアップして紹介したわけだが、それはある意味でわたしが解説のための議論を作っていくための伏線として選択したのもであった。だから「授業の流れの中で関連のうすい意見が排除されてしまうのは良くない」という意見も出てくるわけだ。

しかし、学生の意見を紹介してばかりいると学生達は不安になる。そして何が「正解」なのか、教師の意見を聞きたいものらしい。わたしはビデオはどのようにみてもよいという前提で授業を進めていたので、「正しいビデオの見方」のような結論にもっていくことを意図的にさけた。しかし、そのことは「正解」を求める学生には不満が残ったようである。さまざまな見方があるというだけではどうもおさまらないようだ。「正しい見方」といわないまでも、「わたしの見方」をもっと出すべきだったかもしれない。

#### 4 視聴覚教育の可能性

以上、1998年度夏学期の東京大学でのわたしの授業経験から述べてきた。視聴覚情報の利点は、情報提供者の思惑どおりの情報が伝えられるというより、むしろ意図しない情報が視聴者に伝わるころにあるとわたしは考えている。文字情報は意識的にコントロールされているが、視聴覚情報はかならずしも意図しない情報を伝えてしまう。そのメッセージをクリティカルに読み解くことが、文化人類学における視聴覚教育の重要な課題なのではないだろうか。その意味で、視聴覚情報をテキストの従属的な素材として用いるのではなく、むしろ視聴覚データそのものから問題を発見し、議論を作っていくような教育が必要だと思われる。映像を批判的に読みとる力、いわば「ビジュアル・リテラシー」というようなものを獲得し、高めるような教育が必要なのである。

もうひとつ、視聴覚素材を共有することにより、教師と学生、そして学生どおしがインタラクティブな授業の場を作り上げることができる、ということがある。今回の授業の経験でも学生達は自分の印象が他の学生と同じなのか、あるいは異なるのか、コメントの分布はどのようになっているのか、に大きな関心を示した。

以上の経験に照らしてみると、今回のわたしのCD-ROM版『楽園』の創造——バリにおける観光と伝統の再構築』はまだ文字テキスト情報が勝った内容になってい

て、映像から問題を組み立てていくようにはなっていない。また、授業で試みたようなインタラクティブな部分が欠けている。CD-ROMがたんにデータの蓄積媒体としてでなく、双方向のコミュニケーションのための媒体としても機能しうるかどうか、将来機会があれば、このあたりのことに配慮してバージョンアップをはかりたい。

## 文 献

山下晋司

1996 『『楽園』の創造—パリにおける観光と伝統の再構築』山下晋司編『観光人類学』pp.104-112, 東京：新曜社。

1999 『パリ—観光人類学のレッスン』東京：東京大学出版会。